

原子力安全論理の再構築および市民との共有

…原子力事故再発防止顧問会議(2011.10.26)北村正晴

□個別要件審議前に基本指針への認識共有が必要

- ◆事故発生, 拡大防止失敗の理由: 大筋で明らか
- ◆基本指針策定前に従来論理の再吟味が必要
- ◆本来の原子力安全論理(深層防護)は妥当と想定
- ◆実質性・リアリティの欠如(飯田氏解釈)が大きな問題
- ◆警告への感度低下, 集団的思考停止の誘因
- ◆安全論の世界的進化(次頁)の反映も必要. 進化と無縁な原子力安全論理はこの思考停止と表裏
- ◆その事態を招いた背後理由への視点拡大が必要:
参考例: 囚人のジレンマ状態(武田徹氏)の視点

安全論進化の学習不足

□1970年代から欧米での「技術と組織」論, 「技術と社会」論は着実に進歩. それと隔絶(?)した原子力界

- ◆ Science and Trans-science (Weinberg, 1972)
 - 科学だけでは回答できない「科学技術と社会問題」という認識
- ◆ Normal Accident (Perrow, 1984)
 - 大規模複雑で密結合な系の本質的危険性を指摘
- ◆ Understanding Risk: Informing Decisions in a Democratic Society, (National Research Council, 1996)
 - 影響を受けるのは市民. ∴ リスク評価への市民参加は必然
- ◆ High Reliability Organization (Roberts, Weick, 1984~)
 - 危険な環境と不十分な情報下で高い安全実績を示す組織の研究
- ◆ Resilience Engineering (Hollnagel, Woods, 2004~)
 - 動的に変化する環境と目的相克下で組織安全性維持方策.